WASON
HQ
1104
J74

July 28
1888
no 120

廿一年七月（版權所有）廿八日發兌

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢
府內無稅
郵稅一錢
每土曜出版

第百貳拾號

社説
學年末、女生徒諸子に告ぐ

論説
婦人教育の主義（大鳥圭介）〇日本婦人の服装（渡邊黙）

批評
女子顯才集〇東洋畫手本〇女權眞說〇日本人の婦人論〇教育報知三女雜誌の評

叢話
皇后五才の小女子に及ばず〇幼な兒の文〇一唱再歎〇夢ものがたり〇下婢のつかひ方

小説
さすがに双紙

佳傳
マルテン、ルーテル氏婚姻始末（月の出舍醫）

寄書
女子小學師範學科卒業諸君を送る蜻蛉子

新報

外報

専賣二〇三一、一一五　詳和堂中川昇刻

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 120. July 28st, 1888.

EDITORIAL:— School Girls in the Summer Vacation.

LEADING ARTICLES:— Spirit of Woman's Education, by Senator K. Ōtori; Japanese Ladies and Foreign Dress, by Mr. K. Watanabe.

CRITICAL NOTES:— "Joshi Eisai Shu" (Collection of Prose and Verse by A Hundred Studied Girls); "Joken Shinsetsu" (True Opinion on the Woman's Right); "The Japanese" and Female Education; Three Woman's Magazines.

MISCELLANIES:— The Child and the Queen; Letter from A Little Girl; Golden Dusts; A Night Dream (II), by Miss N. I.; House-Wife and Maid Servant.

NOVELS:— Sasugani (V).

BIOGRAPHIES:—Luther on his Conjugal Relation.

CHILDREN'S COLUMN.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

通信女學の廣告

一册枚數七十葉定價二十錢全國無郵税

去十三日出版せり

通信女學第十一巻發兌

蓋し最良の敎科書

婦人會員の會讀及戸內の獨學に宜ろし

女學雜誌社

●珊瑚の珠　（七十四回）

○バックル曰く良法善政なる者は何れの世何れの國に於けるも皆な其原因は政府に非ずして學者識者に在る也。

○魏徵曰く天下未だ定まらざれば則ち專ら其才を取りて其行を考えず喪亂既に平げば則ち才行兼ね備はるに非ずんば用ゆ可らざるあり。

○ミル曰く人民もし愛國の心なくんば國賴つて以て立つ能はざる也。

○司馬温公曰く吾れ人に過たるものなし但だ平生爲す所ろ未だ嘗て人に對して言ふ可らざる者あらざる耳。

○弘法大師曰く生是れ樂に非ず衆苦の聚まる所ろ死も亦た喜ばず衆憂乍まち逼まる。

○ソクラット曰く自由の政度より發諭の自由を排除し得ば亦た宇宙より大陽を排除し得べし。

○祖禹曰く天子の功は人を用ひて自から用ひざるに在り伊尹を用うるものは湯の功あり傅說を用ゆるものは高宗の功也十亂を用うるものは武王の功也周公を用ゆるものは成王の功なり。

○老子曰く人の畏るゝ所ろは畏れざる可らず。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第百貳拾號 明治二十一年七月廿八日發兌

社説

○學年末、女學生諸君に告ぐ。

人は兎角、ウカ／＼と暮らす者である。花が咲けば花を賞し、月がさゆれば月を賞し、春秋と端なく過去つて、思はずも一年末大晦日の夜と成ます。除夜の鐘は鳴つた、燈明は影を暗くした、今年と云ふ年は最早今夜限りかと思へば、今迄で左程にも感ぜざりし吾が、俄はかに心さみしく爲つて、雜多萬端の思ひが起る」。今ま女學生諸君が立たる〻所ろの此の學年末は、恰かも彼の一年の除夜に均しく、去る一と年の間だに起りたる、さま／″＼の出來事をば、尤も結晶したる、尤も感じ強よき有様にて、諸君に回顧せしむるの時であらう。此の一年中、抑も何を爲したる乎、何を學びたる乎、何如ほどに才學が進みたる乎、何如ほどに吾が品徳は高うなれる乎、凡そ此様なる種々の問題は、必らず今ま、諸君の心中に浮び起るとであらう。

然るに、吾人の想像によれば、諸君は決して怠けては居玉はざりしと思ふです。或は諸君は御自身で、怠け居つたりと考へらる〻ともありませう、然し吾人は夫にも係はらず明言しまするか、諸君は恐らく決して怠たつては居られざりしと信ずるです。一躰、男の學校の書生に向つては、アナタ方固く勉強なされ、立派にお成なされ、と申すが普通の忠告であれども、女學校の生徒方に向ては、アナタ方餘まり勉強を爲さるな、ゆる／＼とお進みなさい、と申すのが敎員の心得である。男女の生徒は、是程に違ふものであるゆえに、今ま此の學年末に臨み、諸君は何如に自身とお悔みなさるに係はらず、吾人は決して諸君の御勉強が足らざりしとは思はず、諸君が此の一年中に、少しにても怠たつて御座つたとは、何如にも信ずるとが出來んとである。

然し、成程諸君は勉強せられた、勉強せられたには相違ないが、其勉強は餘まり過るほどに勉強せられた、言ひ換ゆれば、餘まり不適當に、更らに嚴しく言へば餘まり不順序に、勉強せられた、是はどうも諸君に在つた樣です。若し然るときには、其の勉強は勉強と云つても差支へは無らうが、其の勉強の効能は何如にと云ふときには、殘念ながら諸君が怠けて居られたると同様であらう、故に其點からして申して見れば、諸君は此の一學年中、何如に御勉強なされたに係らず、其の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

勉強なされたる丈けに、お怠けなされたと言はねば成らぬ。ト申すのは、諸君、或は其目前の日課を、丁寧正直に御勉強なさるゝヿが足らずして、たゞ先へ〳〵と望んで、足を浮かせ、宙を飛んで、お進みなされたヿがなからうか、ト申すので、之はどうも諸君に在ッたやうに思はるゝです。」私し、嘗て植物學を致すときに、肩に錫鑵を懸け、天氣晴朗の日、毎度郊外に散步して草を採りました。行く〳〵と路傍に數多の珍らしひ草が見える、喜んで之を採らんとして向ふを見れば、向ふには亦た同じき草が見える、イヤあの方が立派なやうなりと思つて、其儘彼方に行て之を採らんとすれば、亦もや向ふに同じき草が見えて、而も其草の方が更に亦た立派なるやうに見える。斯く迷よひ〳〵て參るうちに、其の類の草が追々と減つて、追々と小さくなり、亦追々と詰らぬものに成る。此に至つて、嗚呼最初にあの草を採つて置けば宜かつたにと、思ふヿが毎度ありましたが、友人どもが草を摘まするにも、皆な私しと同樣の經驗があると申します。夫故ゑ、草を採集する一つの規則に、凡そ珍らしき植物群がり生ずるの地に至らば、先づ其の一つを取れ、而して后ち所々を尋ねて更らに立派なるものを得たらば、則はち之を採つて前のを棄つるも宜しひ、と云へる箇條があるが、諸君が先きへ〳〵とアセッテ、偶と後を顧みらるゝときには、往々右の如き感じが起るヿもあらう。若し起らずとあらば、どうか今ま少しお考へなさつて、或は斯る事なからずやと、深くお省みなさい。

（二）

凡そ少年の通弊は、現在と云へる者を輕んじて、たゞ未來々々とのみ空賴めをするヿであるが、學校の書生には特に其弊が多く、女生徒の方々に至ては、更らに其の弊が多い樣に思はるゝ。而して其の弊の尤も多き所ろは、即はち、平生勉強家と云はれ、有爲のお方と云はれ、志の大いなる方と云はるゝ人々に在つて、斯る末賴母しきお方々が、反つて斯る歎くべき有樣に立至らるゝヿのあるは、實に悲しむべきヿであるです。斯樣のお方に限り、毎日の課業は、先づ善い加減にして置いて、課業外の書物を多く讀まれる、毎日の暗誦は極めて詰らないと云つて、只だ自分勝手に好な書物を讀まれる。而して其の仰せらるゝ所ろを聞けば、蛟龍は池中の物に非ず、學校の規則などに制せらるゝやうでは迚も大きな事は出來ん、試驗が好くつても、日課が甘くつても、好い丈け甘い丈け、其丈で何も効能が無い、と斯樣に言つて自由氣儘に御自身で勉强を爲さる、實に惜しむべきヿであるです。

固より諸君、志は大きくなさい、望は遠くに置きなさい、其の志望は成るべく遠大なるが宜しい。若しも遠大でなくば、どうか左樣に在つて欲しひと、切に希望する所ろであるのですが、志望は何如に大きくとも遠くとも、其の大きひ遠うひ丈けに、現在と云へるものは、之を固く重んじなさらねば成らぬ。察するに、社會に於ては、彼處に總理大臣が御座る、此處に門番が御座る、彼處に陸軍大將が御座る、此處に文部大臣が御座る、と斯樣に所々方々に掛離れて居らるゝが、學校に於ては其の人々は皆な一室の内に御座る。一の女學校の内に、ナイテンゲールも御座らう、ジョアンデアークも御座らう、エリヲットも御座らう、スタールも御座らう、否な此樣な婦人は御座らずとも此樣な婦人に成たりと思し召す方々は御座らう、否なたとひ御座らずとも一の女學校中には、どうか其樣に思召す有爲の方々が多く居らるゝやうに、尤とも懇願するとである。即ち、諸君が志望は、どこ〳〵迄でも遠大にてあれかしと祈るとなれども、其の志望が遠大であるからと云つて、其日前、現在、の事を輕んぜらるゝは、大ひなる過ちならんと、深く心配いたすとである。

凡そ物事には、皆な順序があります、段々があります、決して飛越えて先に達するとは出來ん、若し飛越て先に達したらば、之は進んだるではなく、一寸と飛脚で行つて見たので、直樣元の所ろに歸らねば成らぬのであるのです。」故に、古來の英雄豪傑と云ふものを見れば、家の内をも能く掃除した如くに、天下をも掃除した、小さな事にも小心翼々として心配した如くに、壯大なる事件にも其の膽を固くした、一言するに、能く其の居る所ろの現在を尊んで、遂に后ちの大ひなる所ろに至つたのである。孔子は、支那三千年の大學者であつたが、門番と爲り、火の巡りと爲るときは、能く其仕事を盡した。太閤は、日本の豪傑であつたが、草履取と爲り、庫番と爲るときは、亦能く其仕事を盡した。此の兩人に向つて、其の志を何如んと問れば、何れも素と非常に遠大なる志しを持て居たるにも拘れらず、其目前の義務を盡すとに至つては、決して人に劣らぬ、矢張り立派ある門番であり、矢張り立派なる草履取である、其の門番として、草履取として、立派であるゆえに、故に亦た聖人とし豪傑として、大ひに立派なるものと爲れたのである。

學校に於ける書生の覺悟も、どうか此の樣にありたい、能く日々の科業を鄭寧に學んで、一日一日と進み、一と月一と月

と進み、足踏を固め、急ぐとなく、アセルとなく、最と緩やかに勉強したいとである。地理、文典、歴史などの暗誦は、隨分詰らないやうに思はるゝ所ろもある、然し之を其の暗誦すべき時に於て暗誦し置かねば、后に至ては最早どうしても覺ゆるとが出來ないように成るです。小供の時は小供の衣物を着るべし、學校に居る時には亦た學校で要する丈けの科業を正直に學ばねば成らぬ。毎日毎日宙を飛んで駈け行き、扨て試驗の折に至て、夜も眠らず頭まに詰め込むと云ふは、何んの益にも立たぬ、大ひなる害である、甚だ宜しからんとであるです」。實に、家の内の孝子は、國に於ての忠臣です、學校に於ての正直なる勉強家は、亦たホームに於て、謹直なる妻と爲り、賢良ある母と爲りませう。諸君決して今ま立つ所ろの地を輕んずる勿れ。

哲學者がタイム(時)スペース(塲所)と云ふとを申しますが、之は實に考ふれば考ふるほど、宏大美妙なるものである。抑そも、此の宇宙間の空所は、何處にまで立至つたらば其限りがある乎、之れ程と限りを付くれば、其限りの外も亦た同じく宇宙間の塲所である。塲所はどれ程に廣ひ乎、實に言ふ可らざる程に廣ろひが、彼のタイム(時)と云へるものも亦た、同じく覺る可らざるほどに遠ひ。永遠より永遠に至るまで、皆な悉く時である、過去は抑も何萬億年より初まつたか、未來は抑も何萬億年にまで續くか、其の知る可らざる大古しの初めより、知る可らざる未來の未來に至るまで、皆同じく時と云ふ一語に沒します。扨て此の廣ろひ塲所の内に、此の遠ひ時の間だに、地球は太空〳〵の一物として懸り、人間は眇乎たる一物として其地球の上に住んで居る。彼の軒より落つる一と滴くは、七八尺を通つて地に達するが、此の一滴の中に若し虫ありとせば、此の虫は、甚だ宏大なる大地球の上に甚だ永い間だ住まつて居ると思ふかも知れん、人間が此世の上に於て一生を暮らすも、丁度かゝる墓なき虫の生涯と同樣ではない乎、時として實に思ひ切まるとがあるです」。而して、吾人は此の永遠の時なるものを區畫して、或ひは一生と云ひ、一年と云ひ、月と云ひ、日と云ひ、時、分、秒、などと申す。然し、時は、之を何如やうに區畫したるに拘はらず、常も同じやうに進んで、ズン〳〵と立つて參る。十二月目よは年が反つて來ます、三十日目には月が反つて來ます、今年の花は來年に至つて復たび咲く、今宵の月は翌月に至つて亦たさやけく澄むであらう、然し時は再たび歸り來るとは無い。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一セコンドの響が、チンと鳴るや否や、其時は既に過ぎ行いた、過ぎ行いて亦た決して歸らぬ。或る學者は、今まと云ふ現在ハ無い、悉く過去か、未來であると云つた、夫れは今まと云ふや否や、今まと考ふるや否や、此の今まは既でに過去つて過去と成たゆゑに、人間には眞の現在と云ふものが悟られないと申したが、其是非は扨て置き、時は卽ハち斯樣に早く飛び行くものである。時は、知る可らざる眞暗の所ろより出で來つて、吾人の目前を通り、亦直ちに知る可らざる眞暗の所ろへ行く。此の朋友は、甚ハだ暫時吾人と共に在つて、而して永遠復た見る可らざるの別れを爲すです。吾人は之に尤も價ひある荷物を荷ハせ、尤も適當したる寶を與へて、送り遣るべし、固く手を握り、親しくセークヘンドをして送り遣るべし、目前の時を不親切に遇し、徒らに後に來る時を望み、此時が來るときには、亦た之を冷遇して后に來る時を望む、如此きは實に殘酷なる、實に考へざる所ろのもてなし方であらうと、思ふとです。

ロングフエローの詩に、如何に樂しくとも、一つの未來を賴みとする勿れ、死したる未來をして其の亡骸を葬らしめよ、働らけよ働らけよ此の生くる所の現在に於て、內よは心を滿たし、頭らには神を戴き、此の生くる所の現在に於て、働らけよ」と吟じましたが、エキセルシヤ、只だ現在を輕んぜず、働くべし。諺に、君子は徑に寄らず、又た、近か道には荊棘多しとある。大道は胆々として、尤も平安なる通路であるゆゑよ、日に日に足を固くし、歩み乍らに樂しんで、緩やかよ確かに進むべし。

諸君は今ま、一學年終つて夏のお休みと爲つた。此の一年を顧みて、若しも茲に申す如き事がありしあらば、願はくは次學年より其の勉强の仕方をお變へなさい。諸君は實に勉强を爲されたに違ひない、然し其の勉强を爲さるゝや、左右に在る風光美景をも見ず、たゞ先に〱と急いで行かれたる如くに、勉强を爲された、之は甚ハだ大いなる勉强であつて、而して効能の甚ハだ少ない勉强であつた。何卒、之れよりは、日々の科業を鄭重に稽古し、一ケ月に一ケ月の試驗を安らかに終り、一年に一年の試驗を安心して終り。一に一、二。二に一、二。と申す如く、甚ハだ正しく、甚ハだ順序立つて、其學問を增さるゝとが願ひたい。」然し此の夏休みの間は、宜しく十分にお休みなさい、休むときに休まざるものは、亦た勉强の時に勉强の出來ぬ人である。夜眠らざれは晝は働くとが

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

出來ぬ。十分にお休みなさい、閑雅幽邃の地に精神を養ひ、或は慈愛ある御兩親の膝下に於て、お休みなさい。此の休むと云へる現在をば、亦十分に重んぜざるものは、即はち亦た平生の科業を正直に學ばざる人に同じ。能く休み能く養ひ、次學年の初め迄でに、大層丈夫と爲て、學校にお歸りなさい」。今日學びずして明日ありと言ふと勿れ、今年學びずして來年ありと云ふと勿れ、聖語に、明日の事を思ひ煩ふ勿れ、一日の苦勞は一日にて足れり。

論説

○女子教育の主義

大鳥圭介

左は大鳥圭介君が去る六月十日の東京學士會院演説會に於て演述ありたるものゝ大意を社員が筆記したるものなり。

總論

男女の世に處するは、各々公私の職掌あり、其分を盡すべきとは男女ともに一樣であれども、男子には直接の職務多く、女子には間接の義務多し、是れが即ち其の教育に差別ある次第にて、今ま特更に之を演述する所以である。

日本の國で女子教育と云ふ事は何時頃に始つたか、能く分りませんが、中古支那學が這入つて、高貴の人や僧侶中に學者を出した頃から、女子の中にて學問を收めたる輩も追々世上に廣まりしことと見え、夫の有名なる紫式部、赤染衛門、和泉式部などの如きは、一條天皇の御宇に出でゝ、今から數ふれば凡そ八九百年前の事である。右樣の女流は各和歌に長じ、又た有名の著作もあつたが、然し此等は多く宮中に仕へたる女流にて、特別才俊の輩らである。かの田舍の女子などは論ずる迄もなく、都府の女子にても、其の一般の教育は誠とに、微々たりしことと察せらるゝです。然るに近古明治前迄の有樣は、幼年の頃ろ先づ男子同樣に大抵は手習ひの先生に就き實語教、童子教、女大學、消息もの等を稽古し、一と通り往復の手紙を書くことの出來るものは先づ上等の中にて、歌を詠じ、琴を奏するものは更らに少なき方にて、地理歴史等を心得る輩は、或は一人もないと云ふ姿であつた。

明治維新の後に至て、東京にて女子教育の學校を創設したるは、開拓使なるべし。一躰開拓使で女子教育の事に注意したるは、元と一般に婦人の教育を必要として思ひ付たのではない、北海道を開くには、諸人が是非先づ内地より往かなければならぬ、内地から往く所ろの婦人に教育が無ければ矢張北

海道開拓の成否に關係すると云ふ所ろから考へ付たので、日本全國の女子惣躰の上から考へたのでは無かつた樣です。是は明治四年の事で、東京府下に在る有志の女子をたしか五名と覺へて居りますが、岩倉大使の歐米に渡航せらるゝに托して、米國に留學させ、次に使廳なる芝山內の本坊內に學校を設けて多く女子を募り、和蘭國より女敎師二名を聘して、英語學をも敎授しました。夫故勿論日本の文章を書くとか、漢學地理歷史其他大抵今日の女學校で敎ゆる所ろの學科は、授けた樣でありました。是が日本で西洋流の女子敎育を爲したる始めで、當時私は開拓使に居りましたから、能く存じて居る。トコロが其后に至つて、別に婦人を敎育しなければ成らぬと云ふ事を聞かなかつたが、三四年以前より女子敎育の必要を說く人俄かに多く現れ、都下は勿論諸府縣下に至るまで數多の學校を起し、或は婦人敎育會、或は女子學藝會を設うけ、女子養材に關する新聞雜誌等も、續々刊行あり、實に女子敎育は、世上の大流行物と成り、終に男女同權論まで。輸入する勢ひとなつた。女子敎育と云ふ事は勿論大切の事で、私にも固より異論は無い、東京に限らず其外の都會田舍に至るまで、適當の順序を踐んで、之を誘導するは今日の急務で何人も之に不贊成なるとはあるまじ。然し其敎育の法が、國の慣習より見て不適當なる者であるか、又は急劇に極端に走つて中正を失ふ樣な患ひあるを見れば、之に心付ひて、之を矯正して全國永遠の利を圖るは、蓋し學者の主任ならん。今日女子敎育に付て弊害の芽が露れんとする兆、候尠からず、それゆへ次に之を擧げて一々お話し申さん。但し私の今日述る所は上等又は下等の人に就て言ふのでない、先づ中等位の人を目安として論ずるのである。

女子の節操義務

女の普通の心得方を先に、話しませうが、此の女子の節操、女の務むべき本分、六かしく反譯すれば義務と云ひませう。其を順序に話せば、女の身の上は、第一淑女、第二良妻、第三賢母と、斯く三段に分かれる。

第一淑女とは、德義正しく、志操高く、言語擧止優しく、父母に孝養を盡し、兄弟姉妹の間だ殊に愛憐の情深く、朋友に交りて情義を重んじ、學文に長じ、外國人の訪來るとき一と通りの談話よも差支へなきやう外國語をも心掛、粗ぼ古今の歷史に通じ、內外の地理を知り、普通の數學物理學音樂をも心得て、殊に躰操を勉め、身躰の保全を重んじ、服裝閑雅淸素、

毫も粗暴輕擧の風なく、驕奢華美の姿たなきものなり。

第二貞妻とは、前の淑女の美德を備へ、人の妻と爲りて后ち夫に對し貞節を重んじ、舅姑に仕へて柔順を主とし、夫の姉妹兄弟には眞の血屬の如く隔意なく取扱ひ、家を治るには、其家の分限に應じ、節儉を主とし、蓄財を心掛け、例へば毎月百圓の入金ある身なれば、家計に六七十圓を費し、二三十圓は、其都度郵便局に預け置き、子孫の謀を爲し、衣食住の事は總て身に引受け、何事を爲すにも時限を定めて遲延するとなからしめ、米穀薪材衣服家具等の時價を暗記し、婢僕を役するときは痛く其員を減じ（本邦都府住居の人は殊に多く婢僕を雇ふの弊習あり是れ主婦の怠慢なると婢僕給料の割合に廉なるに由るならん歐米諸國にては中等以上の家にても婢一人以上を使ふものは希れなり）能く其性質を見分けて、職務を命じ、愛憐を含み、虐使することなく、朝夕厨庖に出て、婢僕に先だちて、割烹調理の事を司さどり、更に家室の洒掃を監視し、文書器具を整頓配置し、夫を輔けて書牘帳簿を類別して、不時の捜索に便ならしめ、時宜により夫に代りて書信をも書き、日々家計を記錄し、夫の留守中に來客あるときは、其人物により代りて應接して事務を辨じ、時々朋友親戚を訪ひて交際を親密にする等は、所云る間接の義務とも云ふべき也。又た裁縫の事に至ては、自分の服裝は勿論、夫並に子供等の物迄も、質素の品柄を撰みて、奇麗に仕立て、餘まり時の流行に偏せざるやう心懸け、何事につきても、夫の職務を補佐し、毎日の起居出入に便し、家内和睦、時々は親戚を會合し、樂を奏し、歌を詠じ、一同快樂安心せしむるあるべし。夫婦は鳥の兩翼の如きものなれば、妻の不貞不德は、夫の名節を汚がす事をゆめ〳〵忘る可らず。（未完）

○洋服採用の可否如何ん、日本婦人諸君に告ぐ。

在米國　渡邊鼎

盲人の前に錦を列るは易し釋伽に向つて說敎するは難し然るに世の凡庸論者動もすれば盲人の前に僞りの錦を列べて之を惑はす者少からず予之を稱して迷盲論者と云ひ其の說を迷盲說と名けんとす而して我邦の如き幼稚なる文明國に在つては盲人（無敎育のものを代稱せするなり）の數國民の最多部を占むるが故に常に以て迷盲論者の爲に惑はされ易きを見る近頃着したる女學雜誌を以て之れを察するに近頃日本女服の事に關して彼是迷盲論ありて爲めに一旦洋服に改ためる婦人諸君も復た更に野蠻細工の服裝に變ぜんとするが如き傾きあるもの丶如し。偖婦人洋

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

服の事に關して種々の迷盲說ある樣なれども就中勢力を有すると考ふるゝ彼の西洋の人々が皆日本の婦人服を賛成して洋服に改たむるを非難すと云ふの一事なり而して其の說く所を聞くに云く英國の女王が日本婦人服を賞賛し之を高貴の方へ申し越せりとか或は某國の婦人方は多く日本婦人の洋裝を非難せりとか或は洋行して歸朝せし人の話しに外國の人々には日本婦人服の立派なるを賞して洋裝に改むるを好ずとか眞とにはや空漠として雲を攫むが如き說のみにして少しく目明きたる者は何人も遽たゞしく之を信ずるものあらざるべしと思ひ居たるに豈に圖らんや我邦には未だ目明きの婦人が不足と見へ段々之を信ずるものある由にて近頃は又少しく理窟めきた迷盲論抔を書き立つる者あるが故に益々之を信ずるもの增加する由眞に淺墓あることは云ひながら是非もなき次第なり蓋し斯の如き風說は何人の唱ふる所なるかを知らざれども兎に角甚だしき盲說なることを辨じ且和服と洋服との是非善惡を比較して以て參考に供せん。

先づ何故に外國人は日本婦人服を賞賛すると云ふ說の世上に起りしやを考ふるに是れ固より無根の說にはあらず現に余輩も稀には歐米人よりして斯る說を聞く所にして歐米を見物して歸朝せし人々にも勿論耳にする所なるべきが故に如何にも實說には相違なかる可し左りながら我邦婦人よ深思熟考して能く夫の歐米人が果して日本婦人服を賞賛するや否やを見られよ予固より日夜歐米人に接し居るのみならず彼等も亦頗る日本の風俗人情を知ることを好むが故に時々是等の事に關して語ることありて時に或は日本の事を記したる數種の書籍を出して彼是質問する者なきに非ず而して予が日本婦人服に關して數多の人々と談話せし所を以て之を考ふるに歐米の人は一寸先づ表面的所謂追從には日本婦人服を賛成する者あり然れども是の賞賛の意は唯一寸奇麗なりと云ふに過ぎずして其の腦中毫末の經濟的便利的衞生的等の分子を含有せざることを記臆せざる可らず(未完)

批評

(76) 女子頴才集　（中本一冊四十二葉定價十六錢 發兌所東京本所二丁目中外堂）

此書は鈴木弘恭氏が華族女學校高等女學校跡見女學校成立學舍女子部及び明治女學校等の女生方が文歌中其秀逸なるを編輯ありたるものなり。凡そ和歌及び和文は今の女子敎育に欠く可らざるの學科たり吾人は何れの女學校に於ても此二科の

備わらんとを望むが故に亦た其女生方が能く此の二科に熱心ならんとを尤も願ふものなり、但し今日に至つて尙ほ若し今の女の學ぶべきとは專ぱら此の二科に止ると思ふものあらば是れ大ひなる誤まりなり故に只だ和歌と和文とに長じたりとて直ちに以て之を女子の頴才なりとは許しがたし此書單に女子頴才集と題するの故を以て萬一にも斯る誤まちに陷いるならば殘念なり。尙又た和歌を咏ずるもの只だ三十一文字に限りて別に長歌を作るとを學ばず和文を作るもの只だ古し風のトコロテン平たるすら〳〵躰をのみ好して外に勉むる所なくんば迚も方今の大用には適しがたし。今の歌を咏ずるものは宜しく大ひに美妙の思ひを養ひ之を十百の長句に吟じ出すの伎倆を造れ、今の和文を學ぶ者は宜しく文思を養ひ新語を用ひ風柳糸を梳けづるが如きを以て其の長所なりとは爲ざるべし。吾人が當今の女學校に於ける此兩科に要むるの意見甚はだ多きが故に今ま少さか其の一斑を辨ず。本集中、

首夏山　安藤たね子
朝霞はれてさやけき山のはは夏のこゝろしるしなるべし

月前花　松野てつ子
月もまたあかれじとてや咲花の木のまにやどる春のよは哉

初秋　小出悌子
秋の初の夕暮、かぜひやゝかに打吹て、虫のねはたあはれなれば、とうろかけわたしなどして、文机によりゐたり、やう〳〵更ゆくほどに、そこはかとなく物さびし、やり水のおと軒ばの荻のそよぎ、ひときはみにしむやうに覺ゆるに、草むらの虫の音俄にこゑ高うなり、山の端にかたぶく月池水にかげをうつし、くさ木ゝ置渡すつゆ風にみだれていとをかし、すべて秋の夜はとり〴〵に哀なることのみになむ。

如此きをこそ鳳雛の質ありと云ふべし」。凡そ愚なる歌學者の常として歌はすら〳〵と咏めと云ひ偏屈なる和文家の常として和文に俗語を用ゆるとを嫌ふ是實に和學進步の大妨害也、すら〳〵としたる心を咏はスラ〳〵とすべしゴツ〳〵とした慷慨心を咏出るには如何にすべき乎成程理窟は詩歌に於て或る限り迄は禁物ならん然し之とて一概には申せず、又和文よ今の當用語を用ひず馬車をウマ車と云ひ風船をカゼ船と云ふに至は抱腹絶倒の極と云べし。其他古文を本據としてカナ遣ひを彼是と申の愚なる事、ハベリ候などなくてはと思ふ弊の止たき事、平民に分らぬ辭ばを用ひて雅語と稱するの拙なき事、これ等の理由は他日文歌の論を述るの折りに申さん。

(77). 女學校用　東洋書手本　（蘭竹菊梅二帖定價六十錢　發兌所東京日吉町女學雜誌社）

此帖は八木兼辰氏が女學校生徒の書習ひ手本にとて編輯せられたるものなり同氏は和書の諸派を混同して一躰と爲し之に洋書を加へて一種新流の日本書を作らんとに志願し多年甚はだ熱心して其道に盡力ありと聞く此帖も亦た其主義に依て成るもの也。但し是れ本社發兌の書なるが故に例により是否の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

批評を爲さず一に之を世上の評判に任かす。

(78). 女權眞説　(中本一册五十五頁定價十六錢 發兌所東京築地二丁目聖書會社)

此書は高橋五郎氏が著にして過激なる男女同權論の誤まりを筆誅し且女權に關するの眞理を略述せられたるものあり今編者が其序文として掲げたる者を左に錄し以て批評に代ゆ。

今や女權論の方さに熾んなる時勢及博學なる高橋君を驅って女權論を艸せしむるに至る一の喜ぶべきこと也殊に君をして女子卑屈なるに非ず男子壓制するに非ずと辨せしむるに至る二の喜ぶべき事也而して君をして亦如此く正當適切に之が眞説を發揮せしむるに至る三の喜ぶべき事也抑も世の開明に隨ひ一般時論の蜂起するの日に當ては其間固より過激輕卒に流るゝの愚論者出でざるにあらず猶ほ秋季蘭菊秀芳の園囿中また荊蕀雜草を生ずるを免かれざるが如し然れども之を明治十七八年以前日本社會が尙ほ甚はだ女學に冷淡なりし昔日に比べて余は尤とも感謝の念に禁ずる能ハず蓋し荊蕀雜草を生ずるは寧ろ荒漠たる不毛の原野に優ると云ふべき歟然りと雖ども今日は最早之を大目に見る能ハざるの時節とは爲れり即ハち過激輕卒の女權論は毫末も假さず酷に之を誅鋤せざるべからざるの時節とは爲れり而して所謂る其眞説の何にたるかを聞かんとするの聲四方に高し高橋君の此の著の如き實に其需めに應じて甚ハだ有効なるもの也果して然らば余の喜ひ豈に一二を以て數るに堪ゆべけん哉。　嚴本善治

○近時の女學論

(一)。「日本人」の婦人論は其第八號に於て棚橋一郎氏の署名を以て初めて現はれ出でたり。全篇の主意と云へば、國と國との競爭は多く富强の優劣に由て分かる、國の富强は國の經濟に由り國の經濟は家の經濟に基ひす、而して一家の經濟は無論細君の手の中に在り、故に婦人をして一家統理の才識を得せしむる固より必要なれども亦之をして瑣事を放擲せしめては成らぬ、元來敎育は國の現情に相應すべき筈ゆへ其敎育は決して全く歐米主義の方法に由らず重きを我國相應なる日用の務めに歸せねば成らぬ。之は甚ハだ賛成して措く能ハざる所ろの論なり。蓋し敎育を受けたるの婦人は役に立ねば成らぬ、役に立つとは踏舞交際流行お化粧等の役に立つ計りではなく、一家の母として妻として、助け手として勵まし手として、敎育家として取締人として、其の役に立ねば成らぬ。而して之は國粹保存にあらずして、實に女粹を保存するの道たり。

(二)。敎育報知は其第百廿號に於て「いらつめ」貴女之友及び女學雜誌を評して左の如く言へり、固より當らずと雖ども先づ以て遠からぬ見當あるが故に左に抄出すべし。

雜錄子これを人相學士にきく、人の容貌顏色は幾分か其人となりを表はすものなりと。果して然るや否や。いま試に之を以て三大婦人雜誌を評下せんとす。まづ其正しき順序として雜錄子は右雜誌の容貌を吟味すべし。「いらつめ」は白地に萠黄を以て古き模樣をうつし短册と色紙とを拔きたる趣向は甚奇拔の觀あり。然れども其色紙には稍品あしき外國の女流を細密畫にてうつし出したるは趣あるに似て却て趣を毀ちたるの感あり。さながら歐洲主義の美術と日本主義の美術との衝突したるがごとし。これ豈に美術上の一致と調和とを缺きたるものにあらずや。唯雜錄子をして之を評せしめば歐洲主義の專大黨と國粹主義の獨立黨との會合と云ふの外なし。女學雜誌は紅梅地に新銅版にて櫻楔樣をうつせり。雜錄子は之を以て別に趣ありと云ふこと能ハず。然れどもその雜駁なるか單純なるか自ら一の體を爲せることはまた雜錄子の疑はざる所なり。兎も角も女學雜誌は雜錄子の知る能ハざる所の一種の抱合を爲せるがごとし。貴女の友は桃色地に舊日本の淑女と老女とをうつせり。其の純粹なる日本主義の繪畫をうつせしは趣ありとは云ひがたきも趣を破りたるものにあらざるや明なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜錄子はこれより其一歩を進めて三雜誌內部の眞相に及ぶべし。まづ「いらつめ」の內部の眞相は如何。雜錄子は其第一號より第十二號に至れる社說を一讀したり。其厳然たる國粹保存主義の論說たること雜錄子をして先見の辯を呈せしむるに足るものあり。其英語交り言文一致體の小說は歐洲主義の文學士の手に成れるものには非ざるやを疑はしむ。流行化粧の欄を設けて奬勵するものあるがごときは雜錄子の感服する能はざる所なり。何となれば一般に女子の殊に年頃の淑女の流行と化粧とに注意の鋭敏なること、敢へて「いらつめ」記者の手數を煩はさゞるも可なればなり。批評文藝美術は三雜誌中に於て「いらつめ」が專占せる所なることは雜錄子の容易に云ひ得る所なり。

「女學雜誌」の社說は常に時々適切なる問題をとるに於ては最も鋭敏なるを感ぜしむるものあり。聞くが如くんば主筆巖本君は西敎の熱心なる信者なりと。然らば其所論に於て其眼跡あるがごときもまた當然なり。而して其論說もまた然り。宗敎を外にしては女學子は何等の定說と何等の主義とを有するものなるや、これ雜錄子の窺ふを許さゞる所なり。家政に係はる事項に於ては其最缺乏せる所にして、之を他の二雜誌に比較すればコンマ以下に在るならん。

「貴女の友」は雜錄子とは多少の緣者なれば成るべく之を避けん。然れども其實業敎育と日本主義の優美とは先づ「貴女の友」の所長なりと云ふに於ては差支なきことを信ず。

假に三者の所長を擧ぐれば道德敎育は女學雜誌、美學敎育は「いらつめ」、實業敎育は「貴女の友」に於て互に長ずる所なるがごとし。三者其一を取りて完全なる女流の養成を望む。其難きことは雜錄子の明に信ずる所なり。唯これらの三雜誌の協會の力によりて始めて完全なる女流の敎育を望むことを得べきか。

叢話

○皇后、五才の小女に及ばず

フレデリック第二世の皇后エリサベス陛下の御園丁ピーフハルクトと云へるに五才の小女あり。平生宗敎上の歌へを受けたれば最と可愛らしくて且つ甚だ温なしやかなり。或る時陛下が宮庭を御そゝろわりきの折御目に止まり後ちの日再たび参伺すべしとの仰せを蒙りぬ。扨て某の日に父は之を御殿に連れ参る官女は之を伴ふて陛下の御前に至れば、陛下は近う座を賜うて笑まし氣に招ぎ玉ふ。小女恭うやしく近づき跪まづいて玉衣の裾に接吻しチャント賜はりたる座に就て謹しみつゝ心ともなく彼方を見れば、御食事正さに畢つたるときとて官女等金銀の器物を取片付く、机かけの錦眼を眩まし御陪食人の衣裳天女の衣に似たり。小女は之を打見て、偶と双手をたゝみ、幼ならしき澄み渡つたる聲にて歌ひ出づるは、

イエスの御血とたゞしきとは、
妾わが飾り妾わが衣、
此を打ち着て恐れ無、
君が御座のうつくしきを見ん。

一座愕然たり、官女皆な泣く、陛下思はず叫び玉うは、
アー幸わひの幼兒哉、余は遥かに汝ぢに及ばず。

○幼ゐ兒の文

編者は幼兒に友人多し、此頃ろ十才の某と云ふ小女より送られたる文に、

最愛する兄様わたくしわとのどろちつともあなたにわいませんからをひまなときはおすびにいらつしやい其時香芽子をつれていらつしやいきつといつしよにきてちようだい兄

さんの巖本さんこのごろはたいそうあつくありましたからきをつけなさいましどうぞお○さんによろしくお○さんのおとつさんとおつかさんによろしくあなたののうびようはすこしはよろしゆうございますかこんだお梅さんのいくときに二人でいつておめにかゝりたいとおもつてをりますあなたにキスをおくりますスイキヘンドもおくります

Good bye My dear dear brother.

最愛する巖本さま　　ゑつ　より

おひまならおへんじをください

○一唱百歎

○

かぎりあれば吹ぬも花は散るものを心短かき春の山風　　蒲生氏鄕

○

我國の梅の花とは見つれとも大宮人はなにといふらん　　安倍宗任

○

なからへて花を待べき身ならねば倘惜まるゝ年の暮哉　　大石義雄

○夢ものがたり（其二）　　なを子［草

かゝる哀れをしるやしらずやすみわたる月をめでつゝあそぶらんピアーノのひゞきなつかしきにこのむすめを後にのこして入りて見るにベトーベンがとひしてふ草の屋にはあらで玉簾高かゝげ内には二人のレデース椅子によりたまふ一人の令孃ピアーノをはなれて○昨夜はおいでになりませんでしたね×ハイ少し頭痛がいたしたものですからつひ×孃樣その御服はやつばり越後屋でございますか○ハイ×よいおかつこふで御座いますダガいくら仕立てが宜しくつても着る人の姿がよくなければいけませんのを只仕立屋へ罪をきせて悪ひと云ふのは無理で御座いますね○そうでございますが仕立がよいと悪ひところもかくれますから×それもそうで御座います奧樣あなたは洋服はおきらひでございますか△エ嫌ひと云でも御座いませんが先づすかん方でございますから慈善會の時など一日着つゞけて居りましたら誠に苦るしく病人になりそうでした○この間の會には大層御店が御繁昌でございましたつけね×ハイよふうれましたどふも自分のところで澤山うりたふ御座いますデスが紳商などゝッても知己の人の居る所をそつとにげて行く人があるからこまります○あなた舞踏はおすきですかあれは運動になつて宜しふございますからちと遊ばしたらよろしふ御座いませふ×舞踏も宜ふ御座いますが馬の方がおもしろふ御座います朝一とキアロップすると一日實に心地が

よふございます○しかし奥樣は私の方に御賛成で御座いませふ△ハ玉くしげ二見の浦のしめなはの二の岩にかけや渡らむどちらををとしてもいけませんから平等に賛成しませふ。

「われ旅人ぞうき世をわたるあやうきうれひわか身をかこむをもむくところ天つふる里」と風よつたふる讃美歌は心も清くすみ渡る月をながめて東屋の内に二人の處女のうたふ也。

●ごらん遊ばせあの風に吹るゝ柳は實に涼しそふでは御座いませんか×ほんとふに夏の暑ひときも柳を見ると涼しくありますゆへこゝろから愛しますよ●アレそれでも柳はなびきやすいとか申して人が嫌ふではありませんか×それハ心をしらぬ人のさかしらですなびきやすいよふに見えても柳は折ません却つて杉や松は大層強く見えても暴風か吹くと直ぐに折ます雪のつもつた時も竹は折れないで松の枝がくぢかれるではございませんかあまり抵抗するとかへつてつまらないとに身ををとすやうなとかありますゆへ風に柳の忍耐が學問をする身には殊さらに大切で御座いませふ●忍耐はしなければなりませんが是非もかまはずハイ／＼といふを大人しいといふこの卑屈なる風習は改めなければなりませんそして亂暴よなつてはありませんが活潑に大膽でなければいけません文學にもあれ經濟學でも法律でもなんでも勉強して×オホ・・・あなたは政事家の奥樣よおなりあそばすの●ナゼ／＼×それでも法律を學んだとて女それ自らが政事にあづかるとはゆるされませんものを●だからあなたはいけないと申すのです夫より外に口はきかない智識は入らないといふ東洋風は吹去つてしまふではございませんか朋友として愛する人の爲に助くるといふともありませふし姉さんはホームをもつてその良人の御爲でなければ何事もなさらんおつもりですか×オホ・・・誠よ恐入ました兩人オホ・・・・・●水をつひで下さいもふ十時過でせふね實に時の立つのは早ひものですが久しひ間日本の女子は雲に掩はれていた月のやうでしたが今くもを出しからはこの月の如く清き光をあらはさねはなりません力の及ふかぎり初代の女子の職分を盡さなければなりません×今女に教育をさせよと云そは輿論となりそれゆへ錦を衣ねば再び故郷へ歸らぬといふて出京なさる方も多くある中にも困難に逢ふて中絶し又はせつかく勉強なし漸く進むを花に名染を重ねてをひて名もない小草に狂ふ蝶と仇なる都の風俗にはじめの望みはどこへやらはやりの衣その外の飾りの方を專門になさる方のあるは嘆しひとではございませんか●ほんにそうです大層しめ

つて來ましたどくでせうから家へ歸りませふ×その水つぎは私が持ちませふ。二人はこゝを立出しが萬物は蕭然として松韵ほのかに聞へ月はくまなくしてひるの如く壽にかゝまほしき美景のうちに良友相ともなふ樂しさに家に歸るも忘られて川の岸をなほ逍遥す×白露横江水光接天同じくはわれらもこの川に舟を浮て遊びなばその樂しみも一しほで御座いませふ●そふしたふございますがどふもこの川は人の溺れた後ですからとてもそんなとは出來ません一寸岸に立ても人の口の葉がうるさふございますからどふぞ立派な橋をかけてをぼれないよふよして行通ひしたいものです×外面から人の心は分らないゆへ蓮葉の清きも露のぬれきぬきする世の中の人の言語はどういふともよいとはいふものゝやつぱりまるでそうもゆきませんから●ほんとうに世の中はうるそふございますねへ×それは爭ひ多きわけですは世の人はクライストのあとをしたわず奈破崙の名譽をしたふからですわ。と云折しも誰がいたづらにやこの川の泥水を一人のをとめにいづこよりか注ぎかけたりあなやと叫ぶわが聲に曉の夢さめにけり。(完)

○下婢の使ひ方

一 台所や、下婢も亦た人間ゆへ、決して當り前より餘計に働らけるものにあらず、又休みなくして續くものにあらず、チャン／＼と働かせて、何時間の休みを與へよ、左すれば働らくにも能く働らき、働らく中にも喜んで仕事する。

二 之が出來ぬと云ふは、家の內のキマリが惡るひゆえ也、朝は何時に起き、夜は何時に眠り、三度の食事は何時何時と定め置け、左すれば手數も入費も大層に省け、下婢も亦た働らきよい。

三 一週間、六日は能く働らき一日は休みとし、此の一日は下婢にも休ませよ、決して損にあらず、田舍で尤も忙しひ時には一日休むなり、一日休めば休まぬときよりも早く仕事が出來る。

四 忠義に勤めた下婢には褒狀を送れ、左すれば此の下婢が外に勤むるときは此の褒狀を出して名譽とする、斯樣に成れば、褒狀の無いものは給料が安く、ある者は給料が高くなる、夫故へ褒狀を樂しんで忠義に勤めるものも出來る。橡の下の力もちは下女に望まれぬ、報ひなきの骨折は、下婢などに多くあるものでない。

五 今の處ろでは、下婢計りが惡るひのでない、細君も惡るひ。使ひ樣を知ぬ人の下には、使はれ樣の心得も出來ぬ。勇

將の下に弱卒なし、感心な細君に使はれる下婢は、大抵亦た心得が宜しい、故に下婢を好く使はんとには、先づ使ふ方法を學べ。前年或る縣令は、縣令となつた當分、受附と爲つた。使はれねば使ひやうが分からぬ、自分が下婢に爲つた心得で下婢を使へ。

六 亭主が無理を言へば腹が立う、下婢に無理を云へば自分が腹を立る樣に亦立腹する。亭主に對して我身のイタキを悟り、能勘辨して下婢を使へ。亭主に叱られて腹を立て、代りに下婢を叱れば、下婢は亦た腹を立て、代りに茶碗道具を叱る、茶碗道具は叱らるゝが口惜しさに、ガランカチと慷慨して、身を投げて毀れて仕舞う。

七 給金は當り前で好い、時に臨んで褒美を遣れ、褒美の若干は預かつて遣れ、貯金の心が起れば人間は大丈夫です。

八 下婢が不相應な身形をすれば、させぬが好い、無理な金を遣はさすは、泥棒をさせる基ひです。

九 ひまな時は、面白い本を讀んで聞かせよ、又時々は善い話しを仕て聞かせよ。好い話をする細君は、自然自分も謹しまねば愧かしひ、好い話を聞く下婢には、イツカ夫丈けの効能がある。

十 下婢は細君の秘書官のやうにあらねば成らぬ、細君は下婢を左の腕とせねば成らぬ、左すれば細君の用事も省ける、下婢も面白ひ、嗚呼、忠義仁惠な君臣の古し談しほど立派な談しは無い。

○經濟の骨髓

むかし紀州に豪富なる百性あり田植の日さをとめ凡そ二百五十人餘り出るに其日の朝田植初まるころ近き山中にて大ひなる鷲の犬と爭ろひけるが終に犬をつかみて虛空へ飛上りたるを他より一人かけ來り田植の長にあれを見られよ鷲の犬をとりて空に舞ひ侍るといへば其長詞を制して左る事言ふ可らず今ま苗の植はじめなり衆人この事を知らば皆な大空を仰ぎ見るべし左あるときは少しの間まて此の苗二百五十束を植る程の怠りとあるとて人には語らざりし（雲坪雜誌）

評。經濟の骨髓茲に在り。

小說

○さすがに双紙　　美妙齋主人

第三篇　獅子は燈心で縛れない。（上）

「栗殼さん、御出の…聲を掛けて栗殼銳之介の部屋の障子

を明けたのは花房禮二です。　直に花房は座敷の柱にもたれかゝッて、坐りながら團扇を取り、　それで團扇を手玩物にして居ます。
「夜はどうも涼しうムいますね」。
「はア、どうしても」。　返辭は餘儀ないといふ躰です。
「何時ごろ御歸りに爲るのです」。
栗殼は思はず眼を睜り、
「わたくしですか」。
「へエ」。
「まだ何時とも。　貴君は?」
「わたくしもまだ。　いづれ堀と一途に」。
栗殼は無言です。　花房は微笑を含み、
「どうでしやう、栗殼さん、私と時子と婚禮しては。」
だしぬけの矢は胸をやぶりました、
「えッ?」
「婚禮しては」。
「時子と?」　重ねて先方は問掛けました。
「はイ」。

栗殼からは容易に挨拶が出て來ませんが、しかし其痕跡を隱さうために出したとより外見えぬ、まずい笑顏のみがわずかにあらはれて居ます。

「時子さんと婚禮なさるッて!‥何ですか‥‥親御さんたちの意見は?」。

「それはもウ無論承知です」。

「それで時子も同意で?」

「左樣、時子も同意で。　嬉しさうに言ッて、更に言葉を繼ぎ、「御存じのとほり時子はあのくらゐ學問もありますし‥‥僕は婚禮するつもりです。」

「なるほど、」　有無をも答へずに問のみを掛けて居ます

「もウ御約束なさッたのですか。」

「何を?」　無用な問だと言はぬ計に答へて問ひます。

「婚禮のことを。」

「無論」。　「無論」が幾回も出ます。　その度毎に栗殼の胸はどき〳〵。

日來望んで居たわが戀人と晴れて結婚する約束を、既に親の允許をさへ受けて結んだと聞く本意なさ、無念さ、性質が嫉妬の勝ッた氣性だけあッて通常の人より苦しさの度が強うございます。　思はず瞳孔をじッと据ゑて花房の顏を見詰めましたが、更にそれでも我ながら我顏色も違ッて居るだらうと思付きますので、故さらに無益な處へ眼を拋ちわざと澄まして居る鹽梅、早取寫眞で之を取ッたら直に心理學の插畫にあります。

「それは結構です。　さぞ御喜悦で」。　仕方なしに答へました。

「去かし、貴君、どうでしやう、僕が何人と婚禮する利害は」。

「それは私には何とも言へません」。

「なぜ。」

「なぜッて、私にはまだ‥‥まだあの時子にちと疑はしい處が有るやうに思はれますから」。

「へエ、どういふとが?」

「そら、貴君も御聞きなさいましたらう、あの堀田との一條を。」

この堀田との一條といふのは別に深い仔細のあるのでも無く、何者が言出したのか、堀田何某といふ若紳士とこの時子とが何やら訝しな間柄だとの説が一時行はれ、而も其説はこの時子や堀田と交際して居る人の口から出たと言ふ事ですので

世間の人もよほど信用したのです。が、實際それは痕形も無い浮名で、堀田と時子とはたゞ一二度ほど或る會で顔を合はせたばかりで、決してそのやうな關係が出來たの、出來ぬといふ譯は無いのです。　それを栗殼も心から承知して居ました。　それでゐッて如斯言出したのです。　その本心を尋ねて見ればまづ讒言を爲たいからで、一旦花房に飽きさせて後を自分が取ろうと思ふ、三歳兒の爲さうな策略です。

佳傳

○マルテン、ルーテル氏の婚姻始末

横濱　月の出舍馨

ルーテル氏一日友人メランクトン氏の宅を訪ひ、キアテリン、ホン、ボルン孃にのみ對面いたしたしとこはる、メランクトン氏の細君マルガレツト夫人いそぎいでかくと孃に通ず。

キアテリン孃曰「友よ、妾を伴ひてよ」と夫人に乞ふ。

マルガレツト夫人曰「そは宜ろしからず…氏はあらはに孃一人にといはれたれば…なにかかならず密かに孃につげたき緊要のこと侍らん…」、

「さてキアテリン孃よ…氣を勵まして起ちいでたまへ……」。

かくて可憐なるキアテリン孃はうす氣味わろげにしづ〳〵とルーテル氏の前に進みいづ。

ルーテル氏曰「孃よ余が御身を招きしは他の義にてはなく聊か婚儀に就て相談を遂げん爲にてあり」

余は清肅なることの外は口外せざることを御身が信ぜられんを望む…」

キアテリン孃曰「君よ…しかあれ」

ルーテル氏曰「御身は婚儀をうけ容らるゝ積りにや？」

キアテリン孃曰「いなとよ」

ルーテル氏曰「恐くは…孃はなほ僧尼たる祈誓を愼まるゝと認む…さうとあらば…余が曾て此件につきて實驗せしこともあれば、今述べて孃が注意をひかん…」。

キアテリン孃「默して…更にいらへず」。

ルーテル氏曰「余が之を孃に告るは余の企圖の進歩を助るあらん」

「余も曾て斯る考を懷たりき、寧しろ之を敎へ導く方ありし…御身は僧尼となりて生涯を畢る考なりや」將た賢婦の地位にたちて結婚せんことを望まるゝにや？」

此直言が孃の勇氣を勵ませしと見へて、

キアテリン孃曰「たとひ博士マルテン、ルーテル氏とはいへ未だ自分の心情を告げずして、かく質問さるゝ筈はあきに……。」

ルーテル氏は　笑を呈しつゝ……

「宜くこそ、いはれたり、ゲート孃よ、然らばまづ余より告げまいらせん……」

「茲に善にもあれ惡にもあれ…よろこんで孃をむかへんとする人あり……」。

キアテリン孃は　忽ち紅潮を催ほし眼に爛たる光を放ちつゝ……。

「其人はいかなる御方にや?」

「御身はいまだ其誰なるやをも妾に示し玉はざるにあらずや?」と思ひ切つて續けられたり。

ルーテル氏曰「貴孃は斯事件に就きていまだ余に本意を明かされざるなり……

若し之につきて疑惑さるゝわらんには兎や角ふいふも憚かる處あれば……」。

キアテリン孃　聲音を潜めつゝ……

妾が僧院を離れ出る時には猶彼處に止りたき計りの僞善心にみたされたりき……」

「妾は殆んど强ひられて無智にも一度誓言をたてしのみあり…」

「妾は眞實なる信仰を以て改革宗敎を容るゝものに侍る………」

「妾は久しく唇の禮拜のみを捧げて吾心には神より遠ざかりしにも係はらず吾神は吾を宥るしたまはんと信ず…」。

ルーテル氏は　孃の談話の絶間をうかゞひつゝ……

偖て今ではいかゞなさる?」。

キアテリン孃曰「今は靈と眞實とをもて拜するにいかで神の宥るしを求むべきや…妾は最早や僧尼にてはあり侍べらず……」。

ルーテル氏曰「善くこそ…是余がまち望む正當の答ならんと思ふ…斯くも余が望む處に答へられよかし」。

さすがのルーテル氏もキアテリン孃が氣高かきにト眉を顰めてしばし躊躇ひて見へたり……」

ルーテル氏曰「恐くは…吾愛孃よ…斯かる事件は余自身が孃に語るよりか…寧ろ…マルガレット夫人に委任すればよかりしに…かゝる事件は婦人相互の談話に讓る

方勝りたるならん…然かし余が始めし事なれば…余が之を畢ゆるも可なるべし」

先日カアロルスダット氏の甥なるボデンスタイン氏が…余か許を訪ひ…孃に照會し呉れよと請はれたり」

「彼は孃と結婚せんことを頻りに望めり」

余は其時、先つ孃の婚事に就きての本意を得たる後よあらでは甚だ難きことあらんと答へをけり…」、

「彼は怜悧なる青年にて他には何の妨げありとは認められず…」、

「彼は熱狂なる叔父を好かぬ風あり」、

「彼は答を待たず一時間計り語り續けたり…」。

キアテリン孃が容貌俄かにかわり、感情と紅潮は影だもとめず…。

ルーテル氏曰「彼の青年にはいかゞ答へなばよろしからん?」、

キアテリン孃曰「いかになりとも…御勝手に遊ばせ…左樣聞く上は妾は再び彼御方の御目に懸るまじ…」。

ルーテル氏曰「それは…何故です…孃は了間違をなされたり…現に孃は尚ほ本意を包まるゝと見へる…」、

「孃よ…御身は茲に自然の好配あることを忘れ玉ふな……此青年こそ孃が保護者ともなるべければ…」。

キアテリン孃曰「妾はいかあることも彼人に就きてならば聞度はべらず…」。

ルーテル氏曰「さすれば…御身は巳に他に好配を得られし樣なり…」、

「否と…御話しあれよ…余は御身が爲に何事にても善く取計ひ申さんに…誰か他にも斯く計畫をなせしものありしや…」。

さすがにキアテリン孃も女心に誇りがに……

「然り…議員ボムガートナア氏は同じ計畫をせられたりき…」。

ルーテル氏曰「御身は彼人を撰まれしや」、

キアテリン孃は起ちあがりつゝ…

「左樣……」。

ルーテル氏曰「然し其は余も望む處なり兎角吾友人達も余は彼等が助となるの外に何事の係わりなきを證すならん……」、

「さて…然らば…又御目に懸りましよう」。

此時に憐なる孃は歩をはやめて己が室にいりたり」。

今や孃が夢も醒めそめたり此夢より醒起せしめしものは嚴肅にして淡薄なるルーテル氏其人なり」。

マルガレット夫人は孃が目を赤らめて泣沈める處に入り來り靜かに孃が傍にすり寄り孃をしかと懷きしめて暫時言もかわさゞりき……」。

茲にルーテル氏思らく……キアテリン孃がボランスタイン氏に望をおかずとすれば、ポムガートナア氏に意あるはまた確かなるべし……キアテリン孃は尚ほ柔弱なるに若し一朝撰擧者の世を去るありとせんか孃は自身手づから働くにあらざれば他に保護の策もなからん…よし、余はジエローム、ポムガートナア氏に一書を送て試むべし氏はメレンバルヒに於て名を知られたる青年議員なり」。

茲に於てルーテル氏は一書を認められたり

拜啓、君キアテリン、フチン、ボルン孃に意ありと聞く然るに今同孃に求婚者あり請ふ速に來て之を討れ孃が君に對する愛情は尚ほ衰へず余は君と會語の榮を得んことを希ふ

一千五百二十四年十月十二日　ルーテル拜

ポムガートナア君　足下

此書翰が彼の青年議員の手に達するや彼は疑惑と驚愕の外なかりき……。

氏は實にキアテリン孃の拒絶者たり斷念せしは已に數月前なりしは疑もなかりき……氏は妙案をいだして此事の全く孃が意より出でしや否やを試みん爲に其書翰を封入して之を孃に送附したり。

其後ルーテル氏の友人達は氏に同孃と結婚を勸むる者頻きりなり特に其主なる一人はメランクトン氏其人なり。

メランクトン氏はルーテルに向て曰く

「君は曾て實驗なきことを說敎されたり」。

然れども氏は猥りに人の口車に乘じ又我今なすべきこと多くありとて屢々抗論されたり。

キアテリン孃は此時舊知人より右の書翰を得てより驚くこと一方ならず……マルガレット夫人に托してルーテル氏に詫をいれられたり。

ルーテル氏曰「余は義しと思ふ處をなせるのみ」…「余は誰にも」……然しルーテル氏は未だ學び殘せる一箇の學問あり即ち「婦人の心情是なり」。

マルガレット夫人曰「道理で……御身は疾くよりキアテリン

嬢は手の内のものと思はれしならん、最早や秘訣は顯はれたり。
其確定の眞實なるは以てルーテル氏を信ずるの眞證明ともなるべし。
氏は時ゝ齢四十歳にして嬢の齢は尙其半ばゝも殆んど及ばざる程なりき。
嬢が他の春秋に富める好配を撰まずしてルーテル氏を撰まれしはルーテル氏自からも殆んど信ずるに難かりし程ならん。
然しながらマルガンット夫人は已に之を云はれしなり今やルーテル氏の一身には嬋娟たる淑孃の愛園に新たなる生命の春和を迎へんとするの幸運に進まれたり。
ルーテル氏後ち再ひキアテリン嬢と婚談に及びし時は以前に勝りし成功を得られたり。
嬢が多年靜寂の間内に包みて顯はれざりし愛戀の歷史は今や始めてルーテル氏の心鏡に映射せり茲に於て婚儀漸くに調ひ遂に目出度大禮を擧げられたり。

寄書

○高等師範學校女子小學師範學科卒業生諸君ヲ送ル　蜻蛉子稿

多年螢雪ノ功成リテ、今名譽ノ冠ヲ戴キテ、還ク故郷ノ天ニ向フノ諸君ヨ。諸君ノ附屬小學ニ在リテ教授法ヲ習練スルヤ、余モ亦偶ゝ同校ニ在リテ事ヲ共ニセリ。故ニ今諸君ノ行ヲ送ルニ、尋常寒暄ヲ叙スルノ套ヲ脫シテ、余ガ諸君ニ希望スルノ微衷ヲ告グルモ、諸君ハ必ズ其欠敬ヲ尤メザルヲ信ズ。是レ余ガ駑劣ヲ顧ミズシテ、敢テ此文ヲ草スル所以ナリ。

余ハ常ニ思フ、人間事業中最要至貴ノモノハ教育ニシテ、教育事業中最要至貴ノモノハ婦人教育ナリト。蓋シ平和ナル社會ハ喜バシキ一家ニ起リ、喜バシキ一家ハ淑貞ナル婦人ニ起ル。夫レ人ノ手ニ成レル音樂ハ、如何ニ優美ナルモ、如何ニ閑雅ナルモ、彼レ死セル一機關タルニ過ギザルノミ。婦人ハ天ノ特惠トシテ、生ケル音樂ヲ有セリ。此音樂ヤ、足ヲ動カスヲ要セズ、手ヲ運バスヲ待タズ、何レノ時ニモ、何レノ處ニモ、口ヲ開ケバ即發シ得ベシ。發シテ能ク節ニ當レバ、油然タル平和ノ雨ハ、家人ノ乾枯セル腦田ヲ沾ホシ、愛ノ芽ヲ養ヒ、喜ビノ萌ヲ長ゼシム。彼ノ涓々タル清流ハ、能ク汚ヲ清メ、穢ヲ滌フヿヲ得ルモ、只肉躰ノ汚ヲ清メ、外面ノ穢ヲ滌フノミ。然レ𪜈婦人ハ天ノ特寵トシテ、精神ヲ洗フノ清流ヲ有セリ。抑モ此感情ノ見舞者タル清流(淚)ノ、一タビ注ギ來リテ、時ヲ誤ラズンバ、平和ノ敵ハ必ズ押シ流サレ、汚レタル精神ハ必ズ清メラルベシ。一家人ノ心ヲ洗ヒ清ムルモノハ、婦人ノ淚ナリ。一國民ノ精神ヲ洗ヒ清ムルモノモ、亦婦人ノ淚ナリ。且ツ夫レ婦人ハ第二ノ造物者タリ。彼レノ嬌ニシテ力ナキ膝ハ、天國ノ神机タリ。以テ善人ヲ養成スベク、以テ惡人ヲ造出スベシ。嗚呼此宏大ナル勢力ヲ有テル婦人ニシテ、今其教育ト、其地位ノ如何ヲ察スレバ、實ニ人ヲシテ長大息ニ堪エザラシムルモノアルナリ。宜ナルカナ、現時我國ノ名譽アル學者達ガ、筆ニ舌ニ婦人ヲ論ジテ止マザルコト。然レ𪜈特リ惜ム、彼レ婦人ヲ論ズル學者達ハ、悉ク異性者タル男子ニシテ、其所論亦各ゝ見ル所ヲ異ニシ、教育ノ上ヨリ、衣服ノ末ニ至ルマデ、國風ヲ主トスルモノアリ、歐風ヲ可トスルモノアリ、甲ノ是トスル所ハ、乙ノ非トスル所、丁ノ習ブ所ハ、丙ノ厭フ所ニシテ、甚シキハ婦人ヲ見ルヿ、宛モ一ノ機械ノ如ク、婦人改良トイフガ如キ、文字ヲ掲ゲ來ルニ至ルヿヲ。

風雨晦冥、天地暗黑ノ夜、一點寶玉ノ微光ノ、隱約タルヲ認メ、衆人爭フテ、之ヲ摸索シ、相推排シ、相衝突シテ、東西ニ南北ニ、展轉シテ得ル能ハザルモノハ、實ニ現今我婦人論ノ有樣タリ。今ヤ吾ガ親愛ナル諸君ハ、此暗黑ノ夜ニ、此風雨晦冥ノ天地ニ出デタリ。諸君ノ地位モ亦難カラズヤ。請フ諸君ハ、勇氣ノ簑笠ヲ纏ヒ、愛情ノ光リヲ掲ゲテ、推排衝突ノ群外ニ屹立シ、能ク諸君ガ受ケ得タル、天ノ特惠特寵ヲ揮霍シテ、諸君ガ姉妹ヲ論ズルコト、異性者タル男子ノ、戯玩ニ任ズルナカランヿヲ期セヨ。

諸君ノ友人ハ、諸君ニ送ルニ、世の光ナル三字ヲ以テシタリ。實ニ然リ諸君ハ實ニ世の光ナリ。見ヨ、婦人ノ世界ハ暗黑ナリ。今我國ノ婦人ハ暗黑世界ニ彷徨セ

ルモノナリ。此ノ暗黒ナル世界ニ立チテ、高ク灯光ヲ揭ゲテ、安全ニ之ヲ導クモノハ諸君ナリ。盖シ諸君ノ郷關ヲ出ヅルヤ、諸君ノ親メル青山ハ、滿面ニ笑ヲ含ミテ、諸君ノ常ニ健全ニシテ、速ニ業ヲ了ヘテ歸ランヿヲ希望シツヽ、諸君ヲ送リシナラン。諸君ノ愛セル清流ハ、淺涓ノ嬌音ヲ以テ、諸君ノ行ヲ送リ、諸君ノ成業ヲ祝セシナラン。矧ンヤ愛ノ情ニ富メル、諸君ノ父母兄弟姉妹朋友ハ、皆頭ヲ擧ゲテ諸君ノ行ヲ目送シ、只一日モ速ニ事ナシ果テヽ、歸ランヿヲ願ヒシナルベシ。此無情ノ山川モ、此有情ノ父母兄弟姉妹朋友モ、諸君ニ望ヲ屬スルヿ已ニ此ノ如シ、諸君ノ譽レハ如何ニ高キ乎、諸君ノ責メハ如何ニ大ナル乎。只諸君ハ此譽レノタメニ、此責メノタメニ、曾テ諸君ガ學窓ニ在リテ、貯ヘ得タル智識ノ光リヲ以テ、曾テ諸君ガ特有セル、天ノ生セル愛ノ光リヲ以テ、諸君ガ愛セル郷國ノ、暗夜ナル婦人世界ヲ、照ラスタメニ、盡力セヨ。

男子ハ能ク改進シ、婦人ハ能ク保守ス。保守ノ性ハ、婦人ニ由リテ遺傳セラレ、改進ノ性ハ、男子ニ由リテ遺傳セラルトハ、曾テ余ガ西人ノ說トシテ、記臆スル處ナルガ、實ニ然リ。從來我國ニ於テ、教育社會ニ立チテ、働キツヽアル婦人ヲ見ルニ、多クハ死法ヲ株守シテ、自ラ改良進歩ヲ謀ルニ不借切ナルガ如キヲ見ル。是レ余一人ノ私言ニ非ズ、教育者中屢々聞クノ言タリ。余實ニ我教育者タル婦人ノタメニ之ヲ惜ム。今諸君ハ萬此事ナキヲ保ス。然レドモ、同性者ガ、社會ニ批難セラルヽ、處ヲ知リテ、自ラ鑑ムルハ、決シテ無用ノ事ニ非ルベシ。是レ余ガ婆心、敢テ此一節ヲ贅スル所以ナリ。諸君請フ之ヲ諒セヨ。

京城ノ空氣ハ、三十有餘月ノ間、諸君ノ肺ニ呼吸セラレタリ。京城ノ水ハ、千有餘日ノ間、諸君ノ口ニ浸染セリ。今諸君ハ、此空氣ヲ吸ヒ、此水ヲ飲ミタル、諸君其レ自身ヲ抱キテ、故郷ノ空氣ヲ吸ヒ、故郷ノ水ヲ飲マザル可ラズ。故郷ノ空氣ハ、已ニ諸君ノ肺ニ、適セザルニ至レルナラン、故郷ノ水ハ、已ニ諸君ノ口ニ、可ナラサルニ至レルナラン。然レド此空氣ヲシテ、此水ヲシテ、直チニ京城ト同一ナラシメント欲セバ、圖ラザル暴風ノ、來テ諸君ヲ衝クヿアラン。思ハザル悪浪ノ、來テ諸君ヲ困ムルヿアラン。只暫ク地勢ヲ相、風土ヲ察シテ徐ロニ事ヲ謀ルベキナリ。諸君ガ京城ニ在リテ、見テ慣ルヽモノハ、郷人ノ目ヲ驚カスモノアラン。諸君ガ京城ニ在リテ、聞キテ熟セルモノハ、郷人ノ耳ヲ愕カスモノアラン。

信用(クレジット)ハ、啻ニ經濟社會ノ財貨タル而已ナラズ、實ニ人間社交ノ至寶タリ。今余ハ此詹言ヲ述ベ畢シテ、別レヲ諸君ニ告ゲントスルニ臨ミ、特ニ諸君ニ請フトコロアリ。抑モ今余ガ述ブル處ハ、單ニ諸君ニ告グルノミナラズ、廣ク諸君ト職ヲ共ニセル、諸君ノ姉妹ニ告ゲンヿヲ望ムモノナリ。諸君希クハ、余ガ微衷ノアル處ヲ諒シ、之ヲ諸君ガ親愛セル、姉妹諸君ニ告ゲヨ。

想ヒ見ル、諸君ガ乘ル處ノ車ニ船ニ、諸君ノ故郷ニ達セバ則曾テ別ヲ告ゲタル山川ハ、欣々焉トシテ諸君ヲ迎ヘ、曾テ手ヲ分ツヲ惜ミタル、諸君ノ父母兄弟姉妹朋友ハ、囮然トシテ來リテ諸君ノ手ヲ把リ、諸君ヲ家ニ導クベシ、諸君ヨ、諸君ガ此際ノ感情ハ如何ゾヤ。嗚呼是レ諸君ガ、世の光リトシテ、受ケ得ル名譽ナリ

時維レ臘晷、幸ニ自重セヨ。

新報

（此欄内自由に轉載するを許す）

○文部大臣、高等女學校に於る演說

去十二日東京高等女學校卒業式に於て、森文部大臣の演說あり、平素同大臣の事を記する尤も細密なる教育報知は、其演說の下書と迄に見ゆる筆記を揭げたるに付き、吾人は寧ろ左に之を抄して讀者の一覽に供すべし。

本日卒業証書を受けたる諸君に向ひて一言せん列席の教員殊に女教員も亦能く之を聽取せられんとを望む。

政府に於て此東京高等女學校を設置し且つ之を維持するに相當なる入費を支給して以て成るべく其完全を期する其旨意果して何れにあるか、先つ之を述へん。抑も國家は男女を以て成立し而して國家の教育とは其半は女子教育を謂ふなり、此校を設置する政府の意は推して知り得べきなり、然り而して教育の要如何を問へは女子教育は男子教育に比して更に重すべきものあり、盖し賢良なる女子にあらざれば賢良なる慈母たるを得ず而して人の性質を賢にも愚にも赴かしむるは概して慈母の養育如何に歸す女子は實に天然の教員なり、天然の教員たる女子の教育にして充分ならざる間は不具なる教育たるは言を須たざるなり若し女子にして母たらざるも妻たらん、妻たらざるも女子として社會に列し國家の一部を爲すものなり而して其母たり妻たり又は一女子たるに拘へらず女子の風采行爲は全社會に影響を有する至强至大なるものにして其教育進步せざれば家國全躰の文明は決して望み得べきものにあらざるなり。

女子の國家に對する責任の重大なる斯の如し而して能く此責任を盡し得べき女子の摸範を陶冶するは國家の必要なり是れ政府が此高等女學校を設置し全國をして之に則らしめんと期する所以なり本校の職員は能く此旨意を領して校務に從事するとなれども尙ほ念の爲め斯く云ふものなり次に日本現今の女子は特に困難なる地位に居るとを述べ以て諸子に望む所あらんとす。

特に困難なる地位とは則ち日本に於て昔日に之れなくして今日ニのみ之れあり今世に之れあるも後世に之れなきことならんと思ふ所のものにして而て歐米各國に於て未だ嘗て經驗せざる所のものにあり、即ち數個の夫婦一家をなして其生活を共にする習慣將さに變更せんとする時運是なり盖し日本の舊來の習慣として女子の許嫁するや多くは父母の決する所に由る而して既ニ婚姻するや十の八九は舅姑と室家を同じくす加之其生計の權柄は舅姑之を握る、但し或少數の部分の人は既に舅姑と室家を異にして生計を別にするの新法を行ふものあり、想に此法は追々廣く行へるゝならん然れども恐くは尙ほ數十年間は舊慣行はれ之を改むること甚だ難かるべし而して此事情は今日卒業諸子の如き妙年の人には未だ了解し得ざるべしと雖も年長の後は必ず余の言を思ひ出すことあるべし昔日の女子其舅姑と室家を同くし生計を共にして濟み來りしは必竟昔日に於

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ては女子皆同一なる境遇に居り縦令ひ双方困難なる事情ありしも互に相容れ得たるならん然るに今日の女子は舊例故格の何たるを知らず頓に今日の日新開明の世に遭遇し殊に學校の恩惠に由りて稍々女子の本分を講得し又妻と爲り母となり一家の經濟より交際の要國家の務までも學び知るに至り而して昔日の習慣に成長せる今日の年長即ち舅姑の地位に居るものは概して今日開明の事情に通ぜず故に嫁の知るもの姑之を知らず姑の知るもの嫁之を知らず方圓枘鑿相容れざるの觀なきにあらず此困難なる時運に處し一家の生活をして圓滑ならしむると圓滑ならしめざるとは要するに嫁の心得方如何にあり若し一旦舅姑と事あるに方り嫁の方に於て舅姑教育を受さりしも此しきの事は辨知し居るへき筈なりとして相爭はゝ一家の風波立ところに起るへしされば嫁の受けたる今日の教育は反て一家の風波を起すの本と爲るなり若し此學校の卒業生にして斯る不心得の者ありたらんには爲に此學校の名譽を損するのみならず亦今日舊世新世轉變の大事をも害するに至るへし故に苟も此學校の卒業生たるものは身を處するや嫁しても舅姑に對しては昔日の舊慣を忍守する決心なかるへからず而して今日忍守の辛苦は則ち他日善良なる新日本國を建るに必要なる基礎なりとの眞理をも辨知して其爲には身を犧牲に供すへしと決意する所あらさるへからすされは今後數十年以内に於て身を處すへきの地位に立つ女子ハ忍耐に忍耐を加へ其忍ぶべきを忍ぶハ勿論忍ぶべからざるをも强て忍んで一家の風波を起さゞる樣に勉めざるべからず是余が今日の女子ハ特に困難なる地位に居る者なりと云ふ所以なり然れども斯る辛苦ハ實ハ其中に無限の幸福を生じ反て快樂を買ふの資本と爲るものなり其理合ハ今詳說するに遑なし諸子之を講究せば必ず了解することを得べし。

本日ハ此學校に取り諸子の身上に取り祝賀すべきの佳日なるに前述の如き苦き事を以てするハ甚だ不都合なりとの念を起す人もあらんか然れども今日社會舊新混同せる時代に際會し而して將に前に述へたる困難なる地位に立たんとする所の諸子ハ之を不幸と云ハゝ云へ若し深思せハ此地位は昔日になく後來になく外國にも亦之なき地位なれハ所謂空前絕後の地位よりして此地位を占むるに足るべき素を得たる本日の卒業諸子より取りてハ此卒業式ハ至大の榮典なり請ふ諸子余が意の在る所を熟考せよ。

文部大臣が女子教育に對するの御意見を、斯迄に明白に承知し得たるは、實以て有がたき事也、日本全國の官海女子教育者諸君、須らく好く之を躰せらるべし。

○女髮を以て大綱を造る

伊太利國なるラ、ボス、デル、ポ、ロ新聞本年五月一日發行の者に曰く日本京都に於て建立する東本願寺の佛堂は費金凡そ三百萬弗にて殆んど落成の域に達せり而して其造營の用に供せん爲め婦女の毛髮を以て編みたる一トン（二百七十二貫四百目）の大綱を造れり、余輩は特に毛髮を撰べるの理由を考ふるに蓋し頭髮に依りて拖ハれたる腦髓は常に毛髮に融通するは生理上の事實にして其性質尤も靭强なるを以てなり云々反省會雜誌第八號に譯載して而して之を誤りとも正さず。然らば之は本當にあるとなりや吾人は佛教信女の熱心なるを感歎して措く能はず。

○岐阜縣下の娼妓

一昨年以來岐阜縣下人民の一大問題たる遊廓設置願即ち娼妓公許出願の義は昨年十一月頃にも岐阜及近傍の者七八名出願せし故爲めに昨年の縣會議場にも擔き出し囂々の議論ありしが終に不可說の多數を占めて否決したる處なるが昨今又々娼妓設置說を唱ふる者大に增加し到る處として該此件に及ばさゞるはなき程に立至り大に縣下の民心を惹起せしが此程東京の者にて滯岐中の某始め外一人は厚見郡上加納村に娼妓館設置の儀を縣廳へ願出で大垣の某々等三名右同斷大垣町に於て許可ありたき旨を出願し又た縣下各地にても領を延はして右採否如何を待居り若し色の好き指令になれば續々後馬に乘って縣廳へ馳付け同樣出願せんと構へ居るものあり或は大旱計の者は今般は必らず許可せらるべしなどゝ妄信して名古屋地方へ安娼妓の注文を爲したる者ありと朝野新聞岐阜通信に見ゆ」重ね〳〵嘆ずべきと哉。

○佛教徒設立の女學校、及女雜誌

諸派の佛教徒が所々に設立する、女學校は既でに左の如く多數とは成れり。

清揚女學校	上州前橋	小野島行薫氏發起
親和女學校	攝津神戶	普照寺等有志發起
白蓮女學校	周防德山	赤松照幢氏等發起
關西女學校	京都西六條	佐行澤瑞氏等發起
相愛女學校	大坂西別院	松原深諦氏等發起
高田女學校	越後高田	各宗有志發起
綜藝種智院	大坂　眞言宗	佐伯覺燈氏等發起

而して、女子に關する雜誌にして佛教徒の手に成るものは、

婦人教會雜誌（第六號去廿四日刊）	東京橘町	婦人教會
婦人教育雜誌（第三號去廿一日刊）	上州前橋	上毛婦人教育會

蓋し女學、禁酒、の二事業に對する佛教徒等の盡力は、佛海に照れる近來未曾有の大燈明と云ふべし。

○高等女子師範學校卒業証書授與式　高等師範學校に於て去る十四日女子小學師範學科生徒に卒業証書授與の式を行ひ辻文部次官文部省各局長視學官等臨場し校長の演說及卒業生總代の謝辭ありし由其卒業生の氏名左の如し。

細なほ、淺岡きく、根本しか、仙頭いと、名草ふき、關すゑ、近藤みち、前野きよ、西川かめ、野本とら、福島ちか。

○華族女學校同式　去十八日同校にては卒業式を行ひ皇后宮臨御あらせられ午前九時より式を始め生徒の唱歌あり學監（校長不參にて學監代理す）証書を授與し學監の演說生徒の謝辭祝辭ありて十一時式を終へ次いで皇后宮還御あらせられたりと云ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○京都高等女學校　同校は先日來日本家事經濟實習室を新築中なりし處此程全く落成し九月の始業より活花茶道其他煮炊の業を實習せしむる由其間取は上の間は十二疊敷の一室にて一間の床に一間の違ひ棚を設け一切日本品を列ね次は十二疊半にて抹茶器を具へて茶室とし次は臺所にてすべて日本風の作り方なりと云ふ。

○女子德育會　京都高等女學校の生徒は女子德育會なるものを組織し赤松璉城氏を聘して毎月說教を聽き居たりしが今度婦人の世界と云へる雜誌を發行する由なり。

○靜岡婦人會　同會は去る十七日靜岡女學校にて開設し同婦人會員のみ五十名ばかり來會し井上豐作氏（夏時養生法）齋藤和太郎氏（婦人に關する雜話）の演說あり後幹事の報告等ありて散會せし由。

○佛敎の女學校　去三日神戶親和女學校及び大坂津村の相愛女學校共に開校式を行ひ頗る盛なる事なりしと是れは何れも佛敎主義を以て成立ちしものなる由。

○松本婦人矯風會演說會　去十四日夜信州松本緑座にて開會したる同會は實に盛會にて聽衆七百人餘婦人も八十人斗來聽せりエルマー氏婦人矯風會の主義を信濃日報社の降旗氏婦人矯風會に對する意見を述べて散會したりと云ふ。

○宮城看護婦人會　同會は去廿日縣會議事堂にて開會し幹事長中泉一等軍醫正外數名の看護上の講演ありし由なり。

○靜岡女學校夏期閉校式　去十日同式を擧行せり讃美祈禱を以て會を開き校主佐倉信武氏の歡迎の辭あり引續き生徒の唱歌英語暗誦祝文奏琴及英語對話次に小林光泰氏關口知事の演說ありて式を終り實に淸和なる會なりしと云ふ。

外報

（同前）

●英國女權進一等　地方政府撰擧條例（Local Government Eletor's Act）と云へるもの此頃に至り英國の上下兩院を通過し女王陛下の批准を蒙りぬ昔し千八百六十九年即ち今を距る二十年前に彼の市都役員の撰擧權を女子に與ふる事の許されたる以來之は近來に尤も喜ぶべき一等の進步なりと言ひ囃せり尤も彼の市都撰擧條例と同じく此の撰擧權を受くるの女子はヒトリ者の女及び寡婦に限ると云ふ。

○ミシガン大學女生　本年米國ミシガン大學法律を卒業したる女性廿四人あり。

○貴人の秘書官　米國元老院議官ハウレー氏の細君は其貴人の秘書官と爲つて働らかる。

○米國女大學　米國に於ける女子大學中の主なるものは一にエルスレー大學なり女生六百二十八人あり二にバッサル大學なり女生二百八十三人あり三にスミス大學なり女生三百六十七人あり四にブラインマウル大學なり女生七十九人あり。

○萬國女子大會　同會は永遠に續くべきや否や議定の爲め委員十五名を擧たるとは前の同會景況錄に掲げたるが其后いよ〳〵同會を永續するとに定め英國のミルリセント、フホーセット夫人を名譽委員長とし毎三年に一回づゝ右萬國女子大會を招開するの權を附するとに决したるよし也。

○買ませぬ　米國ペンシルバニア州アレガニー府内の貴婦人二百名は今度結合して凡そ土曜日午后六時以后に商賣する店よりは何物も買はぬとの申合せをなしぬ之は商賣に使へるゝ雇女などは土曜日夜餘り遲く迄で勤むるときは殆んど夜半過に漸く家に歸るほどにて隨て翌くる聖日を淸く守るとの出來ぬに由てなりとぞ而して初めは只だ六人の申合せなりしに今では斯迄に盛んなる結合と爲りたり。

○黒人婦女外國に傳道す　去年フヒスク大學校を卒業したるナンニージョンス（Nannie Jones）と云へる黒人の女史はアメリカンボード（米國傳道局）の指揮に隨ひアフリカのナタールより六百里を隔てたる地方へ向け傳道に出行いたり米國傳道局より黒女を宣敎師として遣へしたるは之が始めてなり。

○製藥學士　ニウヨーク製藥學校近比の卒業生九十二人の中にデソカラッス（Desocarras）孃及びブランチル（Brinner）夫人の二人あり而して夫人が卒業試驗成績は他の男生諸氏にも立越たる由なるが之はブルックリンの或る製藥家の妻にて之れより貴人の職を助けんとて婚后學校に入り此度の榮を得られたるものと云ふ。

○米國婦人禁酒院設立　同院の會堂即ちテムペランステムプル設立の爲めには寄附金既でに二十五萬弗に達し十二層樓建築の準備も畧ぼ出來たるに付き去五月一日より向ふ一年間に角石を置かんとの計畫のよし也。

○二孃の果合ひ　西洋には其文明開化と誇るにも似ず毎度野蠻極まる所ろの果し合ひを爲すとなるが此頃ろも米國ニウメキシコ内ソコルロ郡ルナ谷と云へる小さきモルモン宗派の一村に於て十六歳のサラーポルトン十七歳のメリーシーモールと云へる二人の令孃間に情夫の事柄より果し合ひと成り證據人も無く只だ二人して村外れに至りピストルを以て打合ひぬ時ならぬ不思議の銃聲に百性ども驚ろいて來て見ればシーモールは敵を打止めて其上に突立ち最とほこり顔に「然り妾之を殺せり妾は之を自負す」と呼びたるよし也。

○婦人議員を退く　此頃ろ米國のメソデスト集會に於てウイルラルド孃を初として婦人の議員達が出席せんとしたるを退くる可否の議論は彼地に於ても一時甚だ喧すしきとなりしが當時反對論者に左るものありと名乘つたる博士バックレーの反對論に之は監督敎會に於ても同樣に不可とする所ろなりと申したるに此頃ろインヂアナ州の監督子ツケルバッヘル氏は同敎會の敎文には女子を退くるとの明文决して無しと論評したりとぞ。

○ノルエーの女子　ノルエーのクリスチアナ大學にても醫學を修むる所の女子四人あり。

附告

本誌には長文の記事ありし爲め不得止小說神髓及小供談を除きたり看官乞ふ恕せよ

廣告

巖本善治君序○華族女學校敎授津田梅子題辭
高橋五郎先生述

○女權眞説

定價 金拾五錢

凡そ理に疎くして情に誘はるゝは人世の通患なり、故を以て獨り、舊弊を改め新利を興すに當りても兎角情に激せられて方向を誤り易し、彼の男女同權の説の如き最も此情に誘はれ易しとす、是故に男女の關係を正うして各々其處を得せしめんには必らず先づ道理に由て之が本地位を確定せざるべからず、然らざれば陰陽相和せずして萬種の惡弊是より生ぜん、高橋先生此に見るありて曾て女權眞説一篇を書かれたり、余輩其議論の正確適切なるに感じて茲に先生に請ひ、更に男女優劣論の増加を得、傍らに又時事に關する演説一篇を申しうけて斯く一書を成せり、請ふ世の女權論者各位並に凡て男女の關係を改良せんと欲する諸君は一本を得て理と情との兩端を此議論に叩かれんことを、是余輩が願ふ所なり。敬白

賣捌書肆

銀三 十字屋
通三 丸善
本町 金港堂
日吉町 警醒社
大坂 福音社
名古屋 文興堂
神田錦一 十字屋
銀三 博聞社
通一 大倉孫兵衛
神田 巖々堂
仙臺 伊勢安書店
大坂 上田濟生堂

發行者 東京京橋區築地貳丁目十三番地 東京聖教書類會社

●基督教新聞

第二百六十一號 七月廿五日發兌

基督教新聞●理學宗○其の是非効力○必然の結果○明道雜誌○愛情なき婚姻●教報◎紐育通信(植村正久)◎西遊畧記(平岩愃保)◎長老教會の百年期●論説○基督教の獨立を論ず●寄書○文學に就いて傍聽筆記の必要●雜報數件●一冊金三錢

東京々橋區日吉町廿番地 警醒社

クレームシモン廣告

クレームシモンハ巴理ノ最モ名醫ノ勸メル所ニシテ美麗ナル婦人ハ皆是ヲ用ユ、此藥ハ他ニ其類ナク一夜中ニ面胞(ニキビ)、胼(ヒビ)、寒瘡(シモヤケ)其他皮膚一切ノ出來物ヲ治ス又皮膚ヲ白クシ強クシテ且香氣ヲ添ユ
プードルシモン(粉)サボンアラクレームハ共ニ同シ香氣アリテクレームシモンノ著シキ功能ヲ全クス

一手賣捌 横濱五拾一番 ア、キユルチー

●求婚廣告

年齡廿七身躰強壮性質温厚品行端正家族皆無現職敎官奏任五等財産宅地家屋及貯金學術和漢英獨佛且官立技術專門學校卒業者アリ年齡十九以下學藝小學卒業以上ノ初婚者ニシテ御望ノ方ハ至急下名迄御報ヲ乞フ

下谷東黒門町四番地川上方 野口

東洋畫手本

八木兼辰先生畫

蘭竹 菊梅 二帖 定價金六拾錢

此帖は即ち學畫の楷梯にして四君子より始め花卉鳥獸蟲魚人物山水に至るまでを逐次に模寫し疎なるも浮薄に流れず密なるも刻滯に陷らず加之折枝は陰陽向背を詳かにし又三方を明らかにし此法によつて花を挿めば自然法に適ひ趣をなす山水は吾國有名の眞景を寫し獨り用筆用墨のみならず目未だ見ず足未だ踐ざる奇勝名景筆下に集輯す人物は故實に徵し古圖に基き畫を學ふと共に智識を廣くし吾國他の美術上にても亦鴻益あらんことを期す近刊四君子の部就いて購覽あれ。

東京日吉町八番地 女學雜誌社

心理記臆法通信傳授廣告

エー、茲に廣告致す記臆法と申すは。小生が師英國博士トットニーダー先生が數年間の勉强にて得られし。新發明の一大奇法で御座る。今一寸とドンナ者乎を申さば。先つ吾々が眼に視、耳に聞き、又ハ口に誦る等。凡そ吾々が腦裡に感觸するもの一般、何んでも、彼でも、記臆と、暗記する。とが出來ると云ふ。一大奇法なり。‥‥一寸と其の例を申せば「英佛獨逸等の意味即ち各、字典に原字の下に附記しある、譯文の全脉」を細詳記臆し。又は「古今有名なる詩詞文章等の全脉」を其儘暗誦し(但し有名とハ限らねども)兎に角何んでも彼でも。有形でも無形でも暗記出來ます。**政治家**とか**代議士**とか云ふ人たちも此の法に依りて。**國家**內外**統計諸般**等を暗記し玉へ。隨分効驗は慥に効能も澤山あり。

○小生も此の法に依りて「市川氏和英英和字彙大全の委曲を僅か十日間で悉皆記臆致し **また女史諸丈**にも歌など暗記するには必要なるも其の他澤山の入用なるは。特に其學生諸丈中に其然るを‥‥た。

●●傳授料一人金拾圓○但七月十五日限全金五圓●地方ハ本誌到着の日を以て期日とす

以上之通リナリ傳授ヲ望ム人ハ傳授料ニ送達料十錢ヲ添ヘ○且ツ傳授後決シテ他人ヘ傳授セサル旨ノ誓書ヲ附シ余ヘ申込ムル可シ○傳授料郵便爲替ニテ送致ノ際ハ大坂本局ヘ振込ム可シ返報ヲ要スル書狀ハ一切往復切手又ハ返信料ヲ添ヘベシ

●●**傳授人** 大坂北區堂島濱壹丁目四十九番尾敷忍ゆう方 **岡本翠二**●●

まだある◎速成記音術 ●傳授料金二圓但期限●前同様●金一圓也●

此もまた。前同様のト氏の發明で。もんなる御方でも小學中等以上の方々は慥に正に。相違なく。一週間で實地速記の出來る一種無類便利の傍聽筆記法でありす、

●傳授申込の手續送達料の額も全記臆法全様但し誓書だけはいりません。

まだ色々あれ共略します。委しくは大津さゝ沼六月八日東京時事七月七八九日京都日出七月十日全六日廿三日せかい二號等御一覽願ひます。

翠二追白

發兌				
七月。	七日	十四日	廿一日	廿八日
八月。	四日	十一日	十八日	廿五日
九月。	一日	八日	十五日	廿二日 廿九日
十月。	六日	十三日	二十日	廿七日

定價			
一册。	五錢	郵稅。一錢	(但府內無郵稅)
十册。	四十八錢	郵稅。十錢	(同前)
半年分	一圓十七錢	府外は	一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は	二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

(廿七字詰)

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町暖々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町園々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町亰明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷町四丁目文春堂○横濱住吉町角田晜貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンポード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石春堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年七月廿六日印刷
明治二十一年七月廿八日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

遞信省認可